

哲学のテキストを創造する

——ウィトゲンシュタインとヘーゲル

榎野 沙央理¹

はじめに

私たちはしばしば、ある哲学者のテキストの中で、ある概念がどのような役割を果たしているかを考える。このような営みは、しばしば、「解釈系」と呼ばれる研究において、特定の哲学者のテキストを検討する際に行われる。例えばもし私たちが、中期ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」概念に着目するならば、この概念が言語使用とゲームとのアナロジーを見てとる視点によって形成され、「言語」や「規則」ということでウィトゲンシュタインが何を考えていたかについて知るためのヒントとなることを、知るだろう。

このようにある概念に着目することは、ある哲学者個人の考えについての私たちの理解を深めるための方法に過ぎないと見なされがちである。このとき、ある概念は、特定の哲学者の考えを見てとりやすくするためのヒントという位置づけをもつにすぎない。つまり、ある概念に着目することは、特定の哲学者に対する私たちの興味を満足させるための手段でしかない。

だがある概念に着目することは、それ以上の価値をもたらすことを予感させる。それは私たちが、哲学のテキストの中に登場する一つ概念に着目してテキストを読むことで、そのテキストをある意味で創造するのではないか、という予感である。

この予感を言い表すために、「テキスト」という言葉を二つの仕方で用いたい。第一に、私たちがそこから読解モデルを取り出してくるような文字情報としての「テキスト」であり、第二に、その取り出した読解モデルによって吟味される中で成立する「テキスト」である。私たちがある意味で哲学のテキストを創造するとすれば、そのテキストとは、第二の意味でのテキストである。すなわち私たちが、ある文字情報から読解モデルを取り出してくるだけでなく、その読解モデルを用いてその文字情報を吟味するならば、私たちは、自分たちが当該の文字情報から得たものを元の情報源へとフィードバックしていることになる。このとき私たちは、哲学のテキストに対して創造的な立場にあると考えられる。

私たちの問題は、もし、ある哲学のテキスト内の概念に着目してテキストを読むということが、そのテキストを上記の意味で創造することにつながるとすれば、それは、何をすることであるのかというものである。この問題に対して、本稿は、実践を通じて回答したいと思う。すなわち、ある概念に着目してテキストを読むミニマムな読解モデルを構成し、

¹ morerain19@gmail.com
http://saorimakino.weebly.com

これを用いてウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキストを吟味する²³ことで、私たちのモデル活用として立ち上がるテキストの姿を見せたい。

ある概念に着目してテキストを読むときのミニマムな読解モデルは、次の三つのアプローチに分節化される。第一に、ある概念に着目するアプローチであり、ここで私たちは一定の環境において中心的役割をなすことが期待される概念に着目する。第二に、ある概念を形成する視点を明晰にするアプローチであり、ここで私たちは自分たちが着目した概念を有用な道具として見立てるために視点の変化を被る。第三に、ある概念の使用を探索するアプローチである。ここで私たちは、ある概念が一定の環境の中でもつ使用を、その環境の構想とともに考察する。この三つの段階は、実際に読解を行う際には同時に行われるものであるが、吟味のモメントとして分節化される。

このミニマムな読解モデルを通じて吟味するテキストがウィトゲンシュタインとヘーゲルのものである理由は、本稿が先の問題に取り組む動機が、テキスト読解が創造的行為であるということを支える読解モデルを育むことにあるからである⁴。つまり、ミニマムな読解モデルを通じてウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキストを吟味することで、私たちは、ミニマムな読解モデルの異なる二つの活用方法を獲得し、さらに、この二つの活用を自由に行う視点、すなわち一方での活用を弾力的に行うためにもう一方での活用を利用できる視点を得ることを期待するからである。

以下の節で私たちは、ウィトゲンシュタインのテキストである『哲学探究』（以下では『探究』と呼ぶ）の概念「語の直示的教示」（PU §6）に着目する。そしてこの概念が、最初は、私たちが指差しの身振りで行えることは訓練においては十分になされないと示すように見えるが、この概念が置かれる「訓練」という環境を、指差しの身振りを取り巻

² ウィトゲンシュタインとヘーゲルの横断的研究には、前例がほとんどない。ただし、2017年6月に、ドイツのドレスデン大学で国際会議“Wittgenstein and Hegel—Reevaluation of Difference”が行われたことは注目に値する。この国際会議の会議録は、会議と同じ題目で、2018年10月にDe Gruyter社から出版される予定である。（詳細は以下。<https://www.degruyter.com/view/product/496759>）

³ 両者の比較がこれまであまり行われてこなかった理由は、ウィトゲンシュタインのテキストの中に、ヘーゲルについての言及がほとんどないからであると考えられる。ただし、ウィトゲンシュタインがヘーゲル哲学に関心を抱いていたという事実を示唆する資料が二つある。一つ目は、リー（1980）による講義録であり、これによるとウィトゲンシュタインは、「ブロードに対するコメント」の中で、ブロードが紹介したヘーゲル的な弁証法について、「弁証法的方法はとても健全であり、現にわれわれが物事を行う仕方の一つである。しかし、ブロードの記述が含意したように、aとbという二つの命題から、更なるより複雑な命題を見いだそうとすべきではない。その目標は、われわれの言語において多義性がどこにあるかを探し出すということであるべきである」（p. 74）と語ったとされる。二つ目は、ドゥルーリー（1984）による会話の記録であり、これによるとウィトゲンシュタインは「ヘーゲルは異なって見えるものが実は同じものである、といつも言おうとしていたようだ。それに対して私の関心は、同じに見えるものが実は異なっていると示すことにある」（p. 157）と語ったとされる。

⁴ クヴァンテ（2004）やピンカード（2004）といったごく一部のヘーゲル研究者は、ヘーゲルとウィトゲンシュタインとの間で横断的研究を試みた。彼らの考察は、ウィトゲンシュタインの「治療」や「生活形式」という概念をヘーゲル理解に役立てようとするものであり、両者の思考に通底する概念がなんであるかを考えるためのきっかけを与える。これに対して本稿は、私たちの読解モデルを育むためにウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキストを十全に利用しようとするものである。つまり本稿の試みは、クヴァンテらの考察とは異なり、ウィトゲンシュタインとヘーゲルの両者を扱うことで生じる利益を私たちの知識に直接フィードバックすることに主眼がある。

く様々な条件についての理解を深める実験的なものとして捉えなおすことで、訓練をめぐる私たちのシステム理解を深める中心的概念であるということを示す（二節）。次に、ヘーゲルのテキストである『エンチクロペディー』の概念「判断」（EL §166）に着目する。この概念は、ある主語「このバラ」と動詞「赤い」を繫辞（copula）「である」との接合によって成立するものであり、当の主語と動詞とが持つポテンシャルを十分に展開していないというフラストレーションを孕んでいるが、このフラストレーションを主語と述語のもつ可能な使用の探索を通じて解消することにより、繫辞で接合するというシンプルな手法の重要さを示す概念であることを示す（三節）。最後に、ウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキストの吟味を通じて私たちのミニマムな読解モデルがどのように活用されたかを考察する。特に、ウィトゲンシュタインとヘーゲルとで、不満足やフラストレーションの解消の仕方に差異があることに注目し、それぞれの個性が、ミニマムな読解モデルの第二の段階にどのように反映されるかを考察する（四節）。

以上の試みがある程度成功し、私たちがある概念に着目して哲学のテキストを読むという行為が、その概念をめぐる視点を明晰にする過程で私たちの読解モデルの活用を行うものであるということが言えたならば、このような仕方での読解モデルとともにテキストを立ち上がらせることが、ある哲学のテキストに対する創造的行為であることを示すことになるだろう。

1. ウィトゲンシュタインの「語の直示的教示」

本節で私たちは、ウィトゲンシュタインの『探究』6 節に登場する概念「語の直示的教示」に着目し、シンプルな読解モデルを用いて、この概念とそれを取り巻く環境を構成し再構成していく。そして直示的教示の概念が、最初は、私たちが指差しの身振りで行うことを制限する不満足なものであるように見えるけれども、この概念が導入される「訓練」という環境を、指差しの身振りを取り巻く様々な条件についての理解を深める実験的なものとして捉えなおす過程を通じて、ここで直示的教示の概念が導入される意義を考察したい。

私たちのシンプルな読解モデルは、「概念に着目する」「概念を形成する視点を明晰にする」「概念の使用の探索を行う」という三つのアプローチに分節化されるものである。私たちはこれら三つのアプローチによってウィトゲンシュタインのテキストを吟味し、これらのアプローチによって浮き彫りにされるテキストの姿を示し、同時に自分たちの読解モデルをより豊かなものにしていく。

まず「語の直示的教示」という概念は、ウィトゲンシュタインの次の目的のために役立つ道具という期待のもと導入されるものである。

[...] もし私たちが言語の現象を、プリミティブな使用方法で研究し、その中で、語

の目的と機能をクリアに見渡すことができるのであれば、そうした〔言語の働きを取り囲む〕霧は四散する。

言語のそのようなプリミティブな形態を、子どもは、話すことを学ぶときに用いる。その場合、言語を教えるということは、説明することではなく、むしろ訓練することなのである。(PU §5、括弧内補足は引用者。)

私たちが「語の直示的教示」という言葉に期待することは、ウィトゲンシュタインがどのようにして「語の目的と働きを明瞭に見渡すこと」を可能にするかを知るための手がかりとなることである。

「語の直示的教示」という言葉がどのような役割をもつものであるかを吟味するためには、この言葉が置かれている文脈、すなわち四つの段落によって構成される『探究』6節に着目する必要がある。

われわれは、第2節で述べた〔プリミティブな〕言語がAとBの全言語であり、したがって、一民族の全言語であると想像することができよう。子どもたちは、そのような活動を行い、その際そのような語を用い、そのようにして他人の言葉に反応するよう、訓練される。(段落①)

訓練ということの一つの重要部分、教える者が諸対象を指さして、子どもの注意をそれらのものへ向け、それとともに何か語を発すること、例えば「石板」という語を、そのような形をしたものを見せる際に発音することから成り立つであろう。(これを私は「直示的説明」とか「定義」とか名付けようとはしない。子どもはまだ名づけるということがどういうことなのか問うことができないからである。私はこれを「語の直示的教示 (hinweisende Lehren der Wörter)」と呼びたい。——私は、これが訓練ということの重要部分を構成する、と述べたが、それは人間にとってそのようなになっているからであって、他の仕方で想像できないからではない。)このような語の直示的教示は、語とものとのあいだに一つの連想的結びつきを作り出す、と人は言うことができる。しかし、このことはどういうことなのだろうか。それはいろいろなことでありうる。しかし、人がおそらく第一に考えるのは、子どもが語を聞くと、ものの像がその子の心に迫ってくる、ということだろう。だが、そうしたことが今起こっているとして、——そのことが語の目的なのだろうか。——しかり、そのことが目的でありうる。——私はそのような語(音列)の使用を思い描くことができる。(語を発音することは、いわば想像上のピアノの鍵盤を叩くようなものなのだから。)ところが、第2節で述べた言語の場合には、表象を呼び起こすことが語の目的ではない。(もちろん、そうしたことが本来の目的に役立っているような場合も、見出せないわけではないのだけれども。)(段落②)

しかしながら、たとえ直示的教示がそれを引き起こすのだとしても、——私は、そ

れが語の理解を引き起こす、と言うべきなのだろうか。「石板！」という叫びに応じてしかじかの振る舞いをする者は、その叫びを理解していないのだろうか。——もちろん直示的教示がそのことをもたらすのに役立っているのだけれど、しかし、それは一定の授業を伴っているときだけである。異なった授業のもとでは、これらの語の同じ直示的教示が、全く異なる理解を引き起こすであろう。（段落③）

「私はロッドをレバーに結びつけることによって、ブレーキを修理する。」——もちろん、その他の完全なメカニズムが与えられているのであればの話である。それがあってはじめてブレーキはブレーキ・レバーになるのであって、その助けから切り離されているなら、もはやレバーですらなく、どのようなものでもありうるし、また何ものでもありえない。（段落④）（PU §6、圏点強調は原文、段落への番号付与と下線強調は引用者。）

四つの段落を順に見ていこう。段落①は、『探究』2節のプリミティブな言語を、考察するための道具として導入することを宣言する。2節のプリミティブな言語とは、次のようなものである。

[...]一つの言語を考えてみよう。その言語は、建築家Aとその助手Bとの間の意思疎通に役立つのではなくてはならない。Aは石材によって建築を行う。石材には台石、柱石、石板、梁石がある。BはAに石材を渡さねばならないが、その順番はAがそれらを必要とする順番である。この目的のために、二人は「台石」「柱石」「石板」「梁石」という語からなる一つの言語を使用する。Aはこれらの語を叫ぶ。——Bは、それらの叫びに応じてもっていくように学んだ石材を、もっていく。——これを完全なプリミティブ言語と理解せよ。（PU §2）

この言語は、建築を行うという目的のために、建築家と助手によって使われるものであり、「台石」「柱石」「石板」「梁石」という四つの語からなる言語である。このプリミティブな言語は、『探究』6節で、ある民族によって使われるものとして、また、子どもを「訓練」する共同体の営みとして捉えなおされる。

その上で、次の段落②では、「訓練」としてのプリミティブな言語に具体的な形態が与えられる。訓練としてのプリミティブな言語の一形態は、「教える者」と「子ども」によって営まれ、「指さし」の身振りと、ある語の「発音」とを構成要素とするものである。この一形態は、「語の直示的教示」と名付けられる。

やや長い段落②のポイントは、訓練における語の直示的教示の使用を、「教える者」の視点からだけでなく、「子ども」の視点からも捉えることである。「教える者」の視点は、言語をめぐるさまざまな事柄をすでに習得した視点である。それゆえ「教える者」の視点に立つ人は、「諸対象を指さして、子どもの注意をそれらのものへ向け、それととも

に何か語を発すること」を、「直示的説明」や「定義」と呼びうる活動のために行うことができると考えられる。例えば、人がある形の石材を指差しながら「石板」と発音することで、ある形の石材が「石板」という名前と呼ばれるということを示すことができると思われよう。しかしながら、指差しの方向を向くことができるということ以上にはおそらくまだ何の能力も措定されていない「子ども」の視点を鑑みるならば、直示的教示は、せいぜい、ある形のものとおある音（「石板！」）との間に何らかの関係を示唆する程度のことには貢献するものであるにすぎない。私たちは暗黙裡に、訓練を行う立場から言語使用を確定しようとしがちであるが、訓練を受ける立場のことを鑑みるならば、私たちが指差しによってできると考えていることは決して当たり前ではないと言える。

段落②のポイント述べ直すならば、「教える者」と「子ども」の二つの視点を往還しながら、直示的教示の概念が訓練においてもつ重要性を捉えようとするということである。このポイントは、ウィトゲンシュタインが段落②の後半で見せる逡巡によく表れている。

[...] このような語の直示的教示は、語ともとのあいだに一つの連想的結びつきを作り出す、と人は言うことができる。しかし、このことはどういうことなのだろうか。それはいろいろなことでありうる。しかし、人がおそらく第一に考えるのは、子どもが語を聞くと、ものの像がその子の心に迫ってくる、ということだろう。だが、そうしたことが今起こっているとして、——そのことが語の目的なのだろうか。——しかし、そのことが目的でありうる。——私はそのような語（音列）の使用を思い描くことができる。（語を発音することは、いわば想像上のピアノの鍵盤を叩くようなものなのだから。）ところが、第2節で述べた言語の場合には、表象を呼び起こすことが語の目的ではない。（もちろん、そうしたことが本来の目的に役立っているような場合も、見出せないわけではないのだけれども。）」 [...] (PU §6)

もし私たちが、言語をめぐるさまざまな事柄をすでに習得した「教える者」の視点に立つとすれば、指差しと発音によってできることは極めてさまざまなことが考えられる。だが、直示的教示の使用を明確にするために、「教える者」の視点だけではなく、「子ども」の視点をも役立てようとするならば、私たちはどうしても次のようなフラストレーションを感じざるを得ない。ウィトゲンシュタインが与えてくれた、「このような語の直示的教示は、語ともとのあいだに一つの連想的結びつきを作り出す」というアイディアは、私たちが語の直示的教示を用いて何ができるかを考察するために役立つかもしれない。だが、まだこのアイディアを使って何ができるかはよくわからないではないか、と。

実際にこのアイディアを使ってできることを考えてみよう。教える立場の人が、ある形のもを指さして「石板！」と発音し、子どもがその音を聞いたときにある形を思い浮かべるように訓練する場面を考えるのである。この場面は、ある意味で、語の直示的教示がどう使用されるかについての一つの用例を与えている。というのも、子どもがある形を思

い浮かべるということが、「石板」という語の働きだと考えられる場合もありうるからである。それゆえ私たちは、「このような語の直示的教示は、語とものとのあいだに一つの連想的結びつきを作り出す」というアイデアが、極めて限定的な仕方ではあっても、語の直示的教示の使用を与えてくれるものである、ということをも認めるべきかもしれない。

しかしながら、2節のプリミティブな言語のことを考えてみるならば、そこで「石板」という語は、少なくとも、四種類の石材を区別することや、適格な石材をもっていくという行為に結びついていた。これと比較するならば、ここで「石板」という語を使ってある形を思い浮かべることができるように訓練するということは、「石板」という語を使って（しかも指差しの振る舞いまで導入して）できることとしてはあまりにもくだらないことであるように見える。

今のところ私たちにとって、訓練における語の直示的教示の使用を明確にする中で、「子ども」の視点を活かそうとすることは、単なる足かせでしかないように見える。だがこのことは、見方を変えれば、私たちが自分たちのどんな要求も暗黙裡に前提として引き受けてくれそうな「教える者」の立場からできるだけ動きたくない、という甘えの表れなのではないだろうか。つまり、自分たちの要求や前提を明るみに出したいくないという感情の表れではないだろうか。その一方で私たちは、「子ども」の視点を引き受け、どんな能力をその子どもの視点に前提として要求するかということとその都度いちいち明確にしていく手間を負うこともできる。そしてその利益として、直示的教示の使用を探索するプロセスに透明性を保つということを獲得することができるだろう。

もし私たちが、「子ども」の視点を、言葉の使用を探索するために有益な視点として歓迎するとすれば、私たちのフラストレーションは解消し始める。まず私たちは、訓練を支えるものとして、すなわち「訓練ということの一つの重要部分」として導入したはずの直示的教示が、実は他の様々な事柄に支えられていることに気づかされる。段落③はその萌芽である。

[...] もちろん直示的教示がそのこと [「石板!」という叫びを理解すること] をもたらすのに役立っているのだろうが、しかし、それは一定の授業を伴っているときだけである。異なった授業のもとでは、これらの語の同じ直示的教示が、全く異なる理解を引き起こすであろう。[...] (PU §6)

私たちは、「石板!」という叫びで何を子どもにさせようとするかを、直示的教示によって教え込むことができる。だがそれは、子どもの一定の能力や、教える者がどのようにして子どもを導くかというあり方に依存しており、これらの事柄から孤立させた直示的教示というものに実質を与えることはできない。段落④のブレーキ・レバーの喩えも、このことを示唆している。

ここで私たちが先に確認した、段落②のポイントは、次のように捉えなおされる。「教

える者」と「子ども」の二つの視点を往還しながら、直示的教示の概念が訓練においてもつ重要性を捉えようとすることは、直示的教示がどのような訓練において用いられるかを実験的に探索していくことである。それは私たちが、直示的教示が用いられる訓練の条件（語が置かれる環境）をはじめから固定して考えるのではなく、どのような条件下でなされる訓練であるかを自分たちで実験的に構想しながら、その中で直示的教示の使用を見直していくことである。

このことは、直示的教示の概念を含む訓練のシステム全体を形成していくことである。この試みにおいて、直示的教示という概念の導入は、私たちの訓練のシステムがどんな他の概念との繋がりによって成立しているかを豊かにしていく契機となる。以上が、私たちのミニマムな読解モデルを通じて、ウィトゲンシュタインのテキストを思考の運動として立ち上がらせる試みである。

2. ヘーゲルの「判断」

前節では、三つのアプローチからなるミニマムな読解モデルを用いて、ウィトゲンシュタインのテキストを吟味し、これらのアプローチによって浮き彫りにされるテキストの姿を示した。ここで私たちが思い出すべきことは、この試みが同時に、自分たちの読解モデルをより豊かなものにしていくことを目指してもいたということである。

ミニマムな読解モデルを用いて立ち上がらせたウィトゲンシュタインのテキストでは、概念に着目し・私たちの視点を明晰にしながらか・概念の使用の探索へと至る一連の思考の運動は、ウィトゲンシュタインが特別にこの運動の型を用意するということなく、自然に (spontaneously) 生成することが期待されていたように見える。これに対して、ヘーゲルのテキストは、上記の一連の運動をより戦略的に描いてみせるように見える。もしこの対比が実質をもって説明されるならば、私たちは、ミニマムな読解モデルの異なる二つの活用を獲得するだろう。

そのために私たちは、ヘーゲルの著作『エンチクロペディー』第3部「概念論」における「判断論」に着目しよう。判断とは、外見上は命題の形で表されるが、事物の経験的あるいは存在論的・規範的な本性のことである (cf. EL §167)。ここでヘーゲルは、主語と述語とを「である」(繋辞 *copula*) で結びつけるというシンプルな手法によって、言葉のもつ潜在的な使用をあぶり出そうとする。

ヘーゲルは、判断において、主語と述語は分離するものであると同時に本来同一なものであると語る。

主語、述語、および特定の内容あるいは同一性はまず、関係のうちでありながらも、異なったもの、分離するものとして判断のうちで定立されている。しかしそれらは本来すなわち概念上同一なものである。というのは、主語の具体的な総体性は、決して

無規定の多様性を意味せず、それは個すなわち特殊と普遍とが同一になったものであり、そして述語はまさにこうした統一にほかならないからである [...]。繫辞において主語と述語との同一が定立されてはいるが、しかしそれはさしあたり抽象的な「である」として定立されているにすぎない。しかしこの同一性に従えば、主語はまた述語の規定のうちにも定立されなければならないから、これによって述語もまた主語の規定をもつようになり、かくして繫辞は充実される。(EL §171)

ヘーゲルは、ある判断において、主語と述語は、必ずしも統一された仕方で繋げられているわけではないと考えている。統一された仕方とは、主語と述語のカテゴリーのレベルが一致するような仕方のことである。なぜ繫辞「である」によって主語と述語を繋げただけでは、両者の統一が果たされないかという、そもそも主語と述語は、それぞれ異なる特性を持つものだからである。

[...] 主語は一般にかつまた直接に具体的なものであるから、述語の特定の内容は主語の多くの規定性の一つにすぎず、主語は述語より豊かで広いものである。

逆に述語は普遍的なものであるから、独立に存立し、ある主語が存在するかどうかには無関係である。それは主語を越えて進み、主語を自分のもとに包摂し、主語よりも広いものである。述語の特定の内容 [...] のみが両者の同一をなすのである。(EL §170)

例えば「このバラは赤い」という判断を考えてみよう。まず主語「このバラは」は、「赤いものである」という述語で規定されているが、この規定は、可能な様々な規定の中の一つでしかない。主語「このバラは」は、「赤いものである」だけではなく、「香りがする」ものでもあり、「かくかくの形状である」ものでもある。この意味で、主語はある述語による規定に尽くされないものである。次に述語「赤いものである」は、例文において「このバラは」という主語をもつことになっているが、この述語はこの主語にのみ適用されるものではない。赤いものが存在するかどうかということと、あるバラが存在するかどうかということは別の事柄であり、「赤いものである」という述語は、「この車は」とか、「この国旗は」という主語にも適用されうる。述語は様々な種類の主語を包摂するものであり、この意味で、述語は主語よりも広いものである。

主語と述語が同一なものとなるのは、主語と述語が互いの潜在的な使用をあぶり出し、拡張し合うような働きをすることによってであり、それは判断の発展によって達成される。

それら [主語と述語] があらわしている思想からいえば、主語はまず個別的なものであり、述語は普遍的なものである。しかし判断が発展するにつれて、主語は単に直接的な個別者にとどまらず、特殊なものおよび普遍的なものという意味を持つように

なり、述語は単に普遍的なものにとどまらず、特殊的なものおよび個別的なものという意味を持つようになる。そして主語、述語という名称はそのまま、判断の二つの項の意味は変わってくる。(EL §169)

実際に、判断の発展を見てみよう。判断は、「質的判断」(EL §172)、「反省の判断」(EL §174)、「必然性の判断」(EL §177)という順番で発展していく。このとき、発展性の基準は、主語と述語が互いのもつ潜在的な使用をどの程度豊かに示すことができるかという点に存する。最初の「質的判断」は、「このバラは赤い」や「このバラは赤くない」といった文によって代表される。これらの判断を分析するならば、主語は、述語によって一面的にしか規定されておらず、他にどんな仕方で規定されうるかについての情報を与えてくれない。また述語にとっても、この主語は取りうる主語の一つでしかなく、他のどんな主語を取りうるかについては不明なままである。いわば質的判断は、フラストレーションを孕むものであると言える。ヘーゲルの表現で言えば、質的判断において主語と述語は「形式と内容が適応し合っていない」(EL §172)のである。

だが次の「反省の判断」において、フラストレーションは解消に向かい、主語と述語はより互いを十全に関係づけるものとなる。例えば、「この植物は薬になる」という反省の判断は、「この一つの植物だけが薬になるのではなく、いくつかの植物がそうであるということを含んでいる」(EL §175)。ここで述語「薬になる」は、特定の植物個体だけではなく他の植物個体に対しても、また、特定の植物種だけではなく他の植物種に対しても、もっと言うならば全ての植物種に対しても、適用されうるものとなっている。こうした述語の適用範囲の広がり、結果として、主語「この植物は」の範囲をも、「いくつかの植物は」「全ての植物は」へと拡張する。このように、反省の判断において主語と述語は、互いがもつ潜在的な使用を明るみに出し合っているのである。

こうした判断の発展を、繫辞の働きとして言い換えるなら、「である」は、基本的に一つの同じ「である」という単語の活用形として現れているけれども、どのような主語と述語を結びつけるかによって、主語と述語の間でさまざまな相互作用を生成することができる(cf. EL §176)。繫辞が主語「このバラ」と述語「赤いものである」とを結びつけるとき、そこで生成するものは、せいぜい「このバラは赤くない」という否定的判断であるにすぎない。しかし、主語「この植物」と述語「薬になる」とを結びつけるとき、そこには、ある植物を、薬になるかどうかで見る視点、薬になる植物はどの程度あるのかを探索する視点、さらに、植物イコール薬とみる視点が生成する。

これらの視点は、われわれにとって、植物と薬との関係を考察するときに役立つ方法となりうる。われわれは、植物と薬との関係を考える際に、特定の植物の薬効を問題にすることもできるし、ある薬効の有無によって植物をカテゴライズすることもできるし、あらゆる植物を薬効の観点から分析していくこともできる。われわれは、「この植物は薬になる」という一つの判断から、植物に対するさまざまなアプローチへとつながるような、複

数の判断を引き出すことができるのである。

一見すると繫辞「である」は、主語と述語を結びつけるという、単純なことしかなし得ないものであるように見えるかもしれない。しかし、この極めて単純な道具立てが、判断にフラストレーションの生成と解消の運動を引き起こし、主語と述語がもつ使用の可能性をより十全に展開しながら判断を発展させるのである。

3. ウィトゲンシュタインとヘーゲル

前節では、ヘーゲルの『エンチクロペディー』における「判断」(EL §166)に着目し、この概念が、ある主語「このバラ」と動詞「赤い」を繫辞(copula)「である」で接合することによって成立するものであり、当の主語と動詞が持つポテンシャルを十分に展開していないというフラストレーションを、主語と述語のもつ可能な使用の探索を通じて解消することにより、繫辞で接合するというシンプルな手法を活かす概念であることを考察した。

改めて、ウィトゲンシュタインとヘーゲルとの対比を言い表すならば、両者のテキストは、ミニマムな読解モデルの三つのアプローチのうち、二つ目のアプローチをどのように受けるかという点に違いを持つように思われる。第二のアプローチとは、概念を形成する視点を明晰にするものであり、そこにおいて視点は、フラストレーションの生成と解消のプロセスを経て転回を被る。ウィトゲンシュタインの場合、視点の転回は自然に(spontaneously)行われることが期待されており、この意味ではやや楽観的に見える。あるいは、視点の転回が啓示的な仕方でもたらされることを期待していると捉えるならば、宗教的であると言えるかもしれない。一方、ヘーゲルの場合、フラストレーションの生成と解消を必然的に生じさせるような型が準備されているように見えるという意味で、彼のテキストは運命的な仕方第二のアプローチを受けると言えるだろう。

なぜこのような違いが両者の間で生じるかについて、つまりウィトゲンシュタインとヘーゲルの個性についてここで事細かく論じる余裕はない。私たちが追求することは、両者の対比に着目することで、ミニマムな読解モデルの異なった活用が得られるかどうかという問題である。この問題意識に沿う形で、改めてウィトゲンシュタインとヘーゲルの個性の違いについての考察を行うために、ここでは、ウィトゲンシュタインのテキストが視点の転回を楽観的に期待するよう見えるとしても、それは「成るように成る」の精神の現れなどではなく、必ず視点の転回がもたらされるようなシステムを使用していることに基づいた確信を示しているのではないかと仮定してみたい。そしてその上で、そのような原理が可能であるとすれば何であるのかを考えてみたいのである。

視点の転回を将来的にもたらすような原理に匹敵するようなものがあるとすればそれは、ある概念の使用をクリアにするために必要な、その概念を取り巻く環境を、固定的なものとは考えず、むしろ環境をどのように構成するかという点において自由であるという原理に基づき、環境をどのように構成するかを考えると同時にその中である概念の使用をも(環

境のあり方に合わせて) その都度クリアにしていく、というシステムではないだろうか。というのも、この原理を採用するということは、常に採用しなければならない固定した視点というものを持たない、ということの意味するからである。もちろん、特定の環境においてある概念の使用を一つのものに決めることはできようが、それはあくまで、ひとまとまりの完結した環境においてある概念がもつ使用を保存し定めておくことができるということに過ぎず、常にその特定の仕方では環境が構成できないということの意味しない。

もしこの考えが正しければ、ウィトゲンシュタインのテキストが視点の転回を楽観的に期待するようになる理由は、それが、ある概念が置かれる環境を自由に構成してよいという原理を中心とするシステム、すなわち、視点の生成変化を保証するシステムを採用するからである、と主張することになる。

この主張は、ウィトゲンシュタインとヘーゲルが与える表面的な印象の違いを埋めるものである。その上でなお残る両者の差異があるとすればそれは、ウィトゲンシュタインが、視点の生成変化を保証するシステムを採用するとしても、その生成変化がどのような仕方になるかについては、先回りして決めるということはないだろう、という点に存すると思われる。というのもウィトゲンシュタインのテキストは、私たちの視点に生成変化を引き起こすようなフラストレーションのある状況を作り出しはしても、それ以上のことについては、私たち自身によって考察を進めるように委ねているからである。一方ヘーゲルは、フラストレーションの生成と解消を必然的に生じさせるような型を、どのような視点の生成変化がなされるべきであるかまで、一通りの道筋として教えてくれている。

私たちはここで、ウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキスト吟味を通じて、概念を形成する視点を明晰にするアプローチに二つの活用がある、ということ結論したい。それらのアプローチの活用はいずれも、フラストレーションの生成と解消のプロセスを経て、私たちの視点を固定した状態から解除するという運動を描く。だがそれらのアプローチは、ウィトゲンシュタインのテキストにおいては、視点の生成変化を保証するシステムがあることを示すだけで十分に達成され、ヘーゲルのテキストにおいては、視点の生成変化がどのような仕方ではなされるかまでを明示することで十分に達成されるのである。

おわりに

私たちの問題は、もし、ある哲学のテキスト内の概念に着目してテキストを読むということが、そのテキストを創造することにつながるとすれば、それは、何をするかであるのかというものであった。この問題に対して、本稿は、実践を通じて回答を試みた。すなわち、「概念に着目する」「概念を形成する視点を明晰にする」「概念の使用の探索を行う」の三つのアプローチからなるミニマムな読解モデルを活用してウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキストを吟味し、これらのテキストを私たちの思考の運動として立ち上がらせた。こうした実践を通じ、私たちは、テキストを創造するということが、テキストか

ら得たものをそのテキストにフィードバックすることである、ということを確認できたと思われる。

ここで改めて、ウィトゲンシュタインとヘーゲルのテキストがどのように私たちの思考の運動として立ち上がるかを述べよう。私たちは、ある環境の中に置かれた言葉に期待をもって接近し、その言葉がフラストレーションを感じさせる概念として立ち現れてくることを見てとり、その概念が置かれる環境を、その概念が導入された意義を評価できるようなものへと再構成する過程でフラストレーションを解消する。

本稿の考察は、私たちと哲学のテキストとの関係を見直すきっかけとなるものである。私たちにとって哲学のテキストは、そこに何か客観的に読み取られるべき確固たる内容が存在するものではなく、私たちがどうテキストを読むかという読解システムの構成の材料を与えるものとして捉えなおされるだろう。また、ある哲学者の概念も、その哲学者の思考を見てとりやすくするためだけに有用な指標とみなされるのではなく、私たちが読解モデルを活用するためのきっかけとして働くものであることが認められるだろう。

文献

- Drury, M. O'C. (1984), "Conversations with Wittgenstein", *Recollections of Wittgenstein*, Rush Rhees (ed.), New York: Oxford University Press.
- Hegel, G.W.F. (1991), [EL] *The Encyclopedia Logic: Part 1 of the Encyclopaedia of Philosophical Sciences [Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I]*, translated by T.F. Geraets, W.A. Suchting, and H.S. Harris, Indianapolis: Hackett. (引用に際し、松村一人訳、『小論理学・下』、岩波書店、1978年を使用した。)
- Lee, D. (ed.) (1980), *Wittgenstein's Lectures, Cambridge 1930-1932*, Oxford: Blackwell.
- Pinkard, T. (2004), "Innen, Aussen, Und Lebensformen: Hegel Und Wittgenstein", *Hegels Erbe*, Herausgegeben Von Christoph Halbig, Michael Quante Und Ludwig Siep, Berlin: Suhrkamp.
- Quante M. (2004), "Spekulative Philosophie als Therapie?", *Hegels Erbe*, Herausgegeben von Christoph Halbig, Michael Quante, und Ludwig Siep, Berlin: Suhrkamp.
- Wittgenstein, L. (2009), (PI) *Philosophical Investigations*, 4th edition, P.M.S. Hacker and Joachim Schulte (eds. and trans.), Oxford: Wiley-Blackwell. (引用の際は、藤本隆志訳、『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』、大修館書店、1976年と、丘沢静也訳、『哲学探究』、岩波書店、2013年を参考にしつつ、テキストを独自に訳出した。)

本稿は、2017年9月9日に立命館大学で開催された日中哲学フォーラムでの発表原稿“Wittgenstein: Philosophy as Movements of Thought”に、加筆・修正を行ったものである。

(まきの さおり / 千葉大学大学院人文社会科学研究所 博士後期課程)